

# 入学前教育の取り組みと成果（基礎分野編）2012

松尾 智 則      増 田      隆      橋 本 弘 治  
川 俣 沙 織      橋 本 一 雄

## Education Efforts and Results before Enrollment — Basic Fields — 2012

Tomonori Matsuo   Takashi Masuda   Kouji Hashimoto  
Saori Kawamata   Kazuo Hashimoto  
(2013年11月27日受理)

### はじめに

幼児保育学科では、平成21年度以前までは推薦入試・試験入試の入学予定者に対して紙媒体の『入学前課題』を郵送し、入学後に向けた準備教育を行っていた。しかし、現実的には十分機能しているとは言い難い状況があった。平成22年度入試からの入試制度改革を契機に短期大学の2年間という短い教育課程で専門教育の成果を高めるために、学習習慣の維持向上、基礎学力の保証、専門教育準備等の課題に効果的に対応する入学前教育の構築を行った。試験入試による入学予定者も部分的に対象としているが、重点は、入学者の85%を占めることとなった推薦入試による入学予定者へ、ICTを活用した4ヶ月間の継続的『入学前教育』システムを構築することであった。

※平成21・22年度は入学前の指導全体を『入学前教育』、登校日を『プレ・カレッジ』と呼称していたが、平成23年度からは短期大学全体での名称統一のため入学前の指導全体を『プレカレッジ』、登校日を『スクーリング』と名称を変更した。以降現行の名称を用いる。

本稿は、平成24年度に実施したプレカレッジのシステムと実施内容と入学後に行った学生アンケートの結果を、推薦入試による入学（予定）者を中心として報告する。次いでプレカレッジの内容の内、基礎分野に分類されている「国語」「社会」「数学」「体育」の概要と考察を取り扱う。専門分野に分類されている「保育」「心理」「器楽」「声楽」「造形」「環境」については『入学前教育の取り組みと成果（専門分野編）2012』を参照されたい。

### 1. システム概要

プレカレッジのシステム構築において、数学会で注目されているブレンディッドラーニング（B-ラーニング）を手本としてシステムを開発した。B-ラーニングは通信教育とe-ラーニングを組み合わせたものであり、簡単な計算問題や穴埋め問題等をオンデマンドとして振り返りができるようにe-ラーニングで行い、証明問題等を通信教育として行うことで、通信教育の懸念事項となっているフィードバックのスピード化とe-ラーニングの懸念事項となっている問題範囲の拡充が期待されるものである。

本学科のプレカレッジは手書き課題の郵送や入学後の課題の回収で実行している部分もあるが、その中核としてプレカレッジサイトを構築し、課題の提示、各種情報の提供、課題の回収、登録受け付けや個別指導をweb上で行うこと特徴としている。

具体的システムの構成は以下の通りである。

#### (1) 幼児保育学科プレカレッジサイト（入学予定者用）

学内のサーバに『幼児保育学科プレカレッジサイト』を設置し、幼児保育学科のホームページとリンクを張り、そこからログインできるようにしている。推薦入試合格発表後、入学予定者と出身高校宛にプレカレッジに関する案内文書を郵送している。高校宛には入学予定者への郵送内容と協力依頼文及び閲覧用のIDとパスワードが記載されている。合格者宛にはプレカレッジの説明文及び個人用IDとパスワードが記載されている。

入学予定者用のトップページには『お知らせ』

『よくある質問』『課題一覧』『スクーリング』『e-Mail登録』『問い合わせ』『郵送先』『リンク集』及び『建学の精神』が掲載されている。

なお、ネット環境が準備できない合格者に対しては全て郵送で対応している。

## (2) 幼児保育学科プレカレッジ管理システム（教員用）

教員側の作業用として『プレカレッジ管理システム』を準備し、システム管理者が以外にも Web を利用して課題の出題・回収、アンケートやチェック表の回収を行っている基礎分野・専門分野の担当教員も迅速な対応を行うために直接操作できるようになっている。その他にも、アクセス状況、スクーリング登録状況課題取り組み状況の確認や情報配信を行うこともできる。

## 2. 推薦入試による入学者の属性

平成25年度入試による入学者は215名であった。内訳は試験入試による入学者36名、推薦入学試験における入学者は併設校枠（中村女子高校）・推薦指定校枠・推薦公募枠の合計で179名であった。推薦入試による入学者の出身高校の所在地を見ると福岡県外出身者は66名（36.9%）で4割近くが県外出身者となっている。また、県内学生の内福岡市外の高校出身者は59名で、この大量の遠隔地学生を含むプレカレッジを効果的に運営していくことが大きな課題である。以下、入学後の4月に行ったアンケート調査（有効回収数176件、回収率99.4%）に基づいて推薦入試による入学者の属性とプレカレッジ参加状況と意識の実態を明らかにする。

### (1) 高校在学中の住所別

福岡市内52（29.5%）名、福岡市を除く福岡県内60名（34.1%）、県外64名（36.4%）となり、出身高校別のデータとは若干ずれがある。これは、県境周辺の福岡県内居住の学生が福岡県外の高校へ在籍しているのではないかと推測される。

### (2) 公私別・出身高校所在地別

内訳は表1の通りとなるが、全体では公立高校出身者が135名（76.7%）で多数を占めている。県内及び県外はそれぞれ84.5%、93.5%で公立高校出身者の比率は更に高くなっている。

### (3) 卒業科

普通科141名（80.1%）がその大部分を占めてい

表1 出身高校

	推薦入試	一般入試	計
福岡市内公立	28	6	34
福岡県下公立	49	21	70
福岡県外公立	58	6	64
福岡市内私立	11	1	12
福岡県下私立	9	1	10
福岡県外私立	4	0	4
併設校	15	0	15
計	174	35	212

平成24年度プレカレッジに関するアンケート 問3総計は無効回答を含む

るが、学科の特徴として家政科や保育科出身の学生その他の科として5.7%を占めている。

### (4) 進学的第一志望

多くの併設校枠や指定校枠を含む推薦入試の合格者であるために、幼児保育学科を第一志望とする者が172名（97.7%）となっており無回答を除く残りの2名は本学園の他の学部学科を第1志望としている。

### (5) 受験理由

表2に示しているように、受験理由は、『幼稚園教諭・保育士になりたかったから』（82.4%）、『就職が良いから』（71.0%）が突出しており、『近いから』『都会にあるから』『まだ就職しなくなかったから』などの消極的理由はきわめて少なく合格者の職業指向・目的意識の高さが伺える。

## 3. プレカレッジに対する意識と行動

### (1) 課題への取り組み始期

本取り組みを始めた当初、課題の取得や情報収集、スクーリングのエントリーなどのためのサイトへのアクセス開始が低調で督促文書を送付したり、出身高校へ連絡して指導を依頼するなど多くの課題を抱えていた。それへの対応として、23年度から高校への本取り組みについての情報提供を行ったり、それまで合格通知文書に同封していた案内文を別便にした。このことを踏まえて案内文に目を通した時期を問うと、『到着直後』が85.2%、『スクーリング①まで』11.9%で大多数の合格者は放置せずに目を通していているようである。しかし、それが実際の行

表2 受験の理由

複数回答

	推薦入試 指定等	推薦入試 公募	一般入試	計
親・親戚・知人のすすめ	42	36	8	86
高校や塾などの先生のすすめ	28	28	10	66
高校や中学の先輩のすすめ	18	6	4	28
幼稚園教諭・保育士になりたかったから	76	69	31	176
おもしろそうだったから	3	4	5	12
合格できそうだったから	2	1	2	5
近いから	8	2	1	11
都会にあるから	2	2	1	5
就職が良いから	61	64	26	151
免許・資格が取れるから	41	36	26	103
出前講義やオープンキャンパスをみて	26	30	10	66
まだ就職したくなかったから	0	1	0	1
ホームページやパンフレットをみて	24	22	8	54
その他	2	0	0	2

平成24年度プレカレッジに関するアンケート 問6

動に繋がっているかをサイトへの12月のアクセス数を平成22年度と平成24年度で比較すると、開始当初はあまり差がないが、スクーリングが近づくにつれて24年度の方が積極的にアクセスしている様子が見られた。

### (2) スクーリングへの参加

12月と3月で2回開催したスクーリングへの参加状況については、2回参加者が140名（79.1%）、どちらか1回参加した者が22名（12.4%）の計162名（91.5%）となり、前述したように県外出身者が4割近い状況の中で多くの高校生が意欲的に参加していることが伺える。

### (3) 課題の難易度

入学者から見た課題の難易度評価を『とても難しかった』を4、『難しかった』を3、『易しかった』を2、『とても易しかった』を1として課題毎の平均難易度を評定値として処理すると数学（3.4）、社会（3.4）、器楽（3.0）、器楽（3.0）、保育（3.0）、造形（3.0）が3ポイントを越えており、逆に体育が一番低くなっていた。ただし、自由記述覧を見ると難しさの理由はさまざまで、時間内にやり遂げることが難しかったというものから居住地域内に課題に取り組むために必要な環境がなかったなど様々で

難しさを並列して比較することはできないが、逆に言うような様々なチャレンジの機会を合格者に提供できたということできるのではないかと考える。

### (4) 取り組み環境

本取り組みはWebによる双方向の情報交換を前提としていたので、入学予定の情報環境の状況について危惧があった。取り組み環境の状況の調査結果は、「自分専用のインターネットに繋がるパソコンを所有している。」12.53%、「家族で使えるインターネットに繋がるパソコンを所有している。」77.5%で合計で9割を超えており、ネット環境の普及が窺えた。なお、他の選択肢は全て一桁前半であった。

### (5) 相談相手

課題に取り組むに当たっての相談相手としては『家族』（79.0%）で突出しており、『高校の担任の先生』（31.8%）、『友達』（15.3%）が続いており、関連教科担当教員は15.3%にとどまっていた。

### (6) 情報拡散

合格者を通じて情報拡散がどのように起こっているかを調べると『高校の同級生に話した』（79.5%）となっており、同級生間で進学先から

提示された課題についての情報交換は活発に行っている様子が窺えたが、『先生に報告した』(33.5%)、『高校の後輩に話した』(37.4%)でそれ以外の人々への情報の拡散は低調であるようであった。

## 4. 国語分野

### (1) 概要

国語に関する入学前課題としては、推薦入試による入学予定者に対しては「保育に関連の深い漢字の書き取り問題及び誤答箇所の書き取り練習」と「日本・外国の昔話を5篇読み、そのあらすじと感想を記す」という2つの課題を、試験入試による入学予定者に対しては後者のみを課した。提出された課題を見るに、おおむね熱心に取り組んでおり、学習意欲の高さが窺えた。しかし少数ながら提出遅れや未提出の者もあり、自律的な学習姿勢の育っていないことが認められた。

### (2) 考察

入学後の動向を見ると、入学者のほとんどが選択科目として1年次前学期に開設されている「国語表現法」を受講しており、入学前課題だけで満足することなく、継続して学ぼうとする意欲が感じられた。当該科目では、「漢字の小テスト」とともに、「教員が実演した絵本・紙芝居のあらすじ・感想をノートに記述する」という入学前課題とほぼ同様の活動を毎時実施しており、学習の継続性が保たれている。入学前から続くこの2つの活動により、国語科目へのさらなる関心と確かな国語力(具体的には「読む力」「聞く力」「書く力」)が育っていると云えよう。

今後の課題としては、1年次前学期開講の国語関連科目である「国語表現法」のみならず、1年次後学期開講の「保育内容言葉」や2年次前学期開講の「児童文化」へも接続するための課題内容や実施方法の再検討が必要であると考えている。年々変化する入学生の実態に対応しつつ、学生が2年間の養成課程を経て、卒業時には保育者として求められる知識と技術を十分に有するに至るよう、より効果的な入学前教育のあり方を探究していきたい。

## 5. 社会分野

### (1) 概要

平成25年度入学者への課題は、「社会と世間のちがい」および「裁判員の役割」の二題をそれぞれ800字程度にまとめる課題とした。前者について

は、「世間」という用語を定義し、説明することはたやすいことではないものの、小・中・高等学校で入学予定者が教科として学んできた「社会」という概念と対比することを通じて、それらの言葉からおよそイメージされる「公」という概念について整理することで、入学後の学習への足がかりとなることが期待される。後者は、2009年から施行されている裁判員制度に関する知識と入学予定者の関心を問うものである。解答にあたっては、「裁判員の『役割』」を考えることを通じて、司法制度改革の流れのなか、なぜ裁判員制度が導入されたのかという統治の仕組みに関する本質的な問題を考える必要があり、これらの課題への取り組みを通じて、高等学校までの学習で得た知識を整理し、保育者を目指す学生に求められる入学後の社会系科目への意欲の喚起を促すことを目指している。

### (2) 考察

先に挙げた「社会と世間のちがい」については、各入学予定者において説明方法の違いはあるものの、多くの解答において、二つの言葉がほぼ同義として使われているように思われる旨が述べられていた。その一方で、両者の言葉にはやはり明確な差異があり、その差異は何なのかという問題点についての言及があった。この点、「世間」という語が、より生活に密着した仮想の(「自治体」などのように法令上の実定された区分を持たない)共同体を意味するものであるのに対して、「社会」とは現実の共同体を意味するもの(「世間」という言葉に比べ生活への密着度は総じて低いものと捉えられる傾向にある)であるという見方や、「社会」における規範は法令として定められ、その罰則も明確に定められているのに対して、「世間」における規則や罰則は明確ではない(実定されていない)点を指摘する解答もあった。また、「世間の目」は、「社会」において法令にもとづいて課される罰則以上に厳しいという、かつて、ルース＝ベネディクト(Ruth Benedict)が『菊と刀』で日本文化の特徴として指摘した「恥を基調とする文化」のことを指し示すかのような、論理的によく整理された、深く、鋭い考察も見受けられた。一方、「裁判員の役割」については、高等学校における総合学習の時間等ですでに裁判員制度に関する知識を得ている入学予定者も多いように見受けられ、「冤罪をいかに防ぐことができるか」や「裁判員が死刑判決を下すことの是非」といった今日の裁判員制度をめぐる裁判員の立場からの問題点が指摘されていたように思う。裁判員裁判の対象となる事件は刑事事件に限られるという点

についても、おおむね正しく理解されていた。

入学後の指導では、1年次前期の配当科目である「法と市民生活」においては、法の役割とその根拠（正当性）を考えるべく「社会とは何か」について説明する。この際、プレカレッジにおける解答を見るに、「社会」という概念はおおむね「国家」がその大区分の境界として意識されているようであり、「社会」という語が、人々の共同生活について、より公的な次元の概念として捉えられている傾向が伺われた。この点は、憲法の学習においてよく用いられる「市民 (citoyen)」（＝ここでは公的な個人の意味）と「人 (l'homme)」（＝同じく私的な個人の意味）との概念の違いを説明する際の極めて重要な視点であり、大学における授業との接続を図るうえでのポイントとなる。その一方で、「社会人」という言葉のように「社会」という言葉が「学校」とは違うものというような意味で使われる場合や、（主に批判的な意味あいでも使われる）「男社会」「女社会」のように、「多数派の文化」といった意味で用いられることもある。この点は、「社会」という語が持つ多義性について併せて説明し、学生それぞれがこの言葉の意味を考察することを促すことにしている。なお、1年次後期に配当される「日本国憲法」の授業では、統治に関する原則として三権分立の意義を説明する際、司法への国民参加という裁判員制度が持つ意義についての説明を行うこととしており、これらの振り返りを通じて、プレカレッジにおける課題と大学における授業との架橋を図り、高等学校から大学への連続性を持った学習となるよう努めている。

（今後の課題）

今後の課題としては、課題の提示方法として、より具体的に入学予定者に問題点（問題の所在）を提示できるよう、ケースメソッドによる課題の提示を今後検討したいと思う。入学後の社会の分野に関わる履修科目は、1・2年次前期配当の「法と市民生活」（選択科目）および1年次後期配当の「日本国憲法」（幼稚園教諭免許取得に係る必修科目）であるが、現代社会で暮らす入学予定者自身の生活に深く根差した課題を提示することで、入学後の上記の科目への関心を喚起しつつ、問題を析出し、より深い考察を促すことのできる課題の提示方法を考えたい。第二に、上記の点とも関連して、「法と市民生活」および「日本国憲法」の授業においても、プレカレッジの課題と連続性を持った内容となるよう、引き続き、授業の構成にも一層の注意を払いたい。従来、小・中・高等学校の「社会」の授業で取り扱う法分野に関する学習が、日本国憲法の原則に

関する内容に特化する傾向があったのに対し、司法制度改革の流れのなか、主に社会科教育の一環として2008年から小・中・高等学校で導入されている法教育の実践においては、より現実的なテーマを取り扱うケース教材を使った授業実践研究も蓄積されているところである。こうしたケース教材による授業の構成は、学生が大学において主体的かつ意欲的に授業に臨むことを促すだけでなく、保育者を目指す学生にとって、日々の生活で遭遇するさまざまな事例をどのように捉え、問題点を探り、その解決を図って行くかという思考力を養うことになるようにも思う。こうした授業の構成についても併せて今後研究したい。

## 6. 数学分野

### (1) 概要

数学の課題の趣旨としては基礎学力の維持を大きな目的としている。幼児教育を目指す学生の多くが数理系の科目を不得意としている場合が多く、その為、中学校レベルの問題を中心に問題を作成している。

具体的な内容としては、12月の課題は連立方程式、1月の課題は数独（3×3のブロックに区切られた9×9の正方形の枠内に1～9までの数字を入れるペンシルパズル）、2月の課題は確率と2次関数、3月の課題は数学史、というもので、主たるものとしては12月と2月の課題であるが、その間に数遊びなどを組み込んで楽しんで課題に取り組めるように工夫を行っている。

### (2) 考察

連立方程式は文章を中心として、文章から方程式を組み立てて解いていくアルゴリズム力を問うものであり、確率と2次関数は予測力を問う問題を中心としているが、例年行っている事後アンケートではどちらも難しかったといった感想が大半であり、苦戦しながら課題に取り組んだことが伺える一方で、課題の必要性を感じているといった感想が多く散見される現状である。また、1月や3月の課題については、4か月間の入学前教育の良い息抜きとなり楽しく取り組めたといった感想が散見された。

従って、全体としては概ね出題の意図とした教育効果は得られるものとなっていると感じられる状況である。

## 8. 体育分野

### (1) 概要

幼児保育学科の専門体育の授業科目は2年次に配置されているので入学前教育の成果が入学直後の専門教育へ連動することはない。むしろ一般体育や大学生生活を健康に過ごす準備教育としての色彩が強い。そのため、体育分野においては、具体的な課題を提示するのではなく、以下の内容についての認識を高めておくこと、並びに実践できるものについては各自で実践に努めることを推奨している。

- ①規則的な生活を送ることを心掛けるとともに、栄養、休養、適度な運動のバランスをとることにより、防衛体力（抵抗力）を高める。
- ②日常生活の中でこまめに体を動かしたり，なるべく交通機関に頼らず，できるだけ歩くように心掛けることにより，持久力（スタミナ）を高める。
- ③運動あそびの指導のための基礎的な技能（例えば，マットあそびや跳び箱あそび，鉄棒あそびなど）の習得に努める。

### (2) 考察

①および②の内容については，入学後の1年時前学期および後学期開講の「健康・スポーツ科学A・B」において，その具体的な実践方法について指導している。また，③の内容については，改めて2年時前学期および後学期開講の「体育A・B」において，その具体的な技能の習得の指導を行っている。

## おわりに

平成24年度の幼児保育学科の入学前教育のシステムと，その主たる対象となった推薦入試による入学予定者の属性と意識及び基礎分野の取り組みは以上の通りであった。ここから明らかなことは，大部分の入学予定者は積極的に取り組んでいるが，残念ながら一部の指導が徹底できていないことと基礎分野の指導内容が入学後の教育内容との連動が十分意識されているが改善の余地があるということであった。従ってその効果を更に上げるために一層の改善が必要である。各課題内容と提示・指導方法の改善はもとより，学習の意義浸透や学習意欲の向上に向けた魅力ある又は説得力のあるコンテンツの開発により，より多くの合格者の行動変容を引き出すとともに，この取り組みを通して高校生や高等学校への本学科の魅力の浸透を図っていきたい。